

平成十五年度

第十四回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー（公開講座）

日本の若者はなぜ世界で最も人を殺さなくなつたのか

講師（進化生物学者・早稲田大学教授）

長谷川 眞理子

本日はこのようなところにお招き頂きまして大変恐縮でございます。私の拙劣な分析ですけども、人間の行動について最近五年くらい分析しておりますので、その成果の一つをご紹介しますと思います。私はもともと動物の行動と生態をずっと研究して参りまして、野生の動物が野生の生態的環境の中でどのような行動を進化させるかという研究で、野生のチンパンジー、アフリカのチンパンジー、イギリスの鹿とか羊を研究して参りました。今現在は、スリランカの象と孔雀の研究しております。この七、八年は人間のこともやはりはじめまして、特に統計を使って殺人がどのようにして起こるのか、そしてその殺人のいろいろな原因が、人間をとりまく社会的環境が変わるとどのように殺人の様相が変わるのかを研究しているわけですが、今日はその一部をお話したいと思います。グラフその他を見ていただいた方がいいと思いますので持ってきました。今日のタイトルは「日本の若者はなぜ世界で最も人を殺さなくなつたのか」という題名をいただいておりますけど、準備している間に若者の話だけではなくて、殺人から探ると戦後の日本の社会がどのように変化したかということが色々な意味で見えてくることがありますので、それを若者の殺人の減少だけではなく、親と子の間の確執・葛藤、親子の殺人のことを少し話したいと思います。戦後日本社会の変化を殺人から探ると、私はずっと自分の研究を行ってきましたして他の研究者たちともいろいろこうい話をしている間

に、一つメッセージとして言いたいことができました。それは心の本質主義というのは間違いだということ。詳しくお話しますが、きつかけとしては、最近、少年の凶悪犯罪が激増しているとか、若い人達が切れるようになり、人を殺したりすることが増えている。そういう危機感や社会が悪くなっているということがよく言われるようになりました。だいたい前に言われていた、切れる十七歳はその後はどうなったのか、というと、切れる二十歳になった訳ではないし切れる二十二歳になった訳ではなく、切れる十七歳というのがそのまま、酷いことになってるわけではありません。新聞報道などでは一過的にそういうことが言われましたが、結局きちんとした追跡調査は報道されませんでした。相変わらず色々突発的に起こった事件を見て、少年の凶悪犯罪は激増しているというようなことが、よく言われております。でもこれは、誤りです。また、最近子供を虐待する母親が激増し、日本人の女性の母性がおかしくなっている、という話もよく聞かれますが、これも間違いです。このようなことが、新聞報道などを通じて、とてもセンセーショナルに言われていますが、原因を我々の心に求める、内側に求めるといって、そういう説明がとてよくみられます。子供を虐待する母親については、最近母親の心がおかしくなり、子供を可愛がることができないうようになってしまったとか、最近の少年の心というのが、人間の命の尊さが分からない心になってしまったというような説明です。心は、自分が持っている本質であり、普通の人は良い心を持っていて、犯罪者は訳の分からない、自分とは全く違う心を持った人間である。そういう、心が内側から本質的に変わらなければ良くならないという考えを「心の本質主義」と呼ぶことにします。なぜこのようなことが誤りか、と言いますと、まず、統計的に分析をして、実際、現象がどう起こっているかを科学的に見ますと、少年の犯罪が激増しているなんてことはなく、日本の殺人の特徴は別の所にあることが分かります。また統計的・科学的に分析すると、子供の虐待が激増してるわけではありません。世間の常識が誤りかという理由の一つは、現象を正しく分析をしていないということ。また、「心の本質主義」の解釈の問題ですが、心という、本質的にその人の中に変わらない何かがあつて、人間はその本質的な自分の内側の

心に基づいて行動している。人間の行動が変わってしまった、ということは心が変わってしまったということであり、悪いことをする人が増えたというのは、心が荒廃したからだ、という考えです。これは、周りの環境と心との関係が無視してしまっています。同じ心を持った同じ人間でも、違う環境に置かれたら、同じ心が違う方向に出るかも知れません。このようなことは考えずに、本質的にその人の内側の心というのが問題だという解釈をするのは、違うということをお願いしたいと思います。まず統計的なことについてですが、百万人あたりの殺人率を計算してみます。例えば、今年、若い人が、人を殺したという事件が五件あったとか、去年は四件だったとか、その次は十件だったといった風に、生の数を比べても意味がありません。何故ならば、そのような若い人が潜在的に何万人いて、その何万人の何人が殺人をしたかが問題ですから、母数である同じ世代の人達の数の違いを補正して、全部百万人あたりの人数にし、出現率がどれだけ変化したかという計算をしなければいけません。これは一九九〇年代後半のデータです。この一番左側のバーが十四歳と十五歳で、真ん中の黄色いバーが十六歳十七歳、橙色が十八歳十九歳を示しています。これらの集団で、百万人あたり何人、人を殺したかという殺人率を計算したものです。そうしますと、十八・十九歳は九五年から九九年まで増えているかのように見えます。それから十六・十七歳は増えたり減ったりしていて、増え続けというカーブではありません。十四・十五歳は、九五年から九七年に増えましたが、その後は減りました。でも、一番注意して頂きたいのは、この縦軸です。百万人あたり、たかだか十人の話な訳です。百万人の患者で十人死ぬような病気について、今年は何人死んだ、今年は何人死んだといって騒ぐ病気があるでしょうか。百万人雇っている人の中で死ぬ人が十人や十六人。それが今年四人になった、次の年は八人になったということが、増えた減ったといつて大問題になることはないでしょう。要は、百万人という潜在集団をとつても、少年は十何人しか殺してない訳です、ですから、ものすごく稀な現象です。稀な現象というのは、統計的にたまたまの要因で変動します。何かトレンドがある訳ではなくたまたまの要因で、これだけ出現率の低い現象というのは変動をします。ですから、九五年

から九九年を比べて、一部増えてるような気がする所があるように見えても、それが本当に、実質的に増えていると言える現象なのか、それとも、たまたまの変動なのか、とても見ただけで言えることではありません。それから、例えば戦後五十年間を比較して最近はどうなんだという風に、もつと時間を長くし、全体を見てみなければいけません。というのはとても殺人率自体が低い国なのですが、その日本で、誰が主に殺人をしているかというと、それは中高年です。図中の緑色のバーが四十代の人、真ん中の黄色のバーが五十代の人、橙色が六十代の人で、先程のグラフと同じように、九〇年代後半をとつてあります。この縦軸を見て頂きたいのですが、先程のグラフでは、せいぜいのところが十六人でした。しかし、中高年は、一番上が三十人ですから二倍です。大体このような感じで、いつも、変わらずに、これだけ殺人をしています。ですから日本という国で、最も殺人が起こりやすい年齢集団というのは、若者ではなくて、中高年だったのです。これは、世界的に見てとても珍しい現象です。世界的に見てどこの国でも、一番殺人をするのはほぼ例外なく二十代前半なのですが、日本では、二十代前半よりも四十代後半から五十代前半の方が、よく人を殺しています。こんな国は先進国では他にありません。日本だけです。どうしてそういう事になったのかというのはとても興味深いことですし、日本の世の中の変化というものを表しています。少年殺人のグラフだと、縦軸の一番上は百万人あたり十八人、という所でグラフが書いてしまう訳ですが、中高年になると、二十五人以上の所まで、縦軸をとらなきゃいけません。つまりこれは、殺人の出現率が、中高年の方が高いという事を示している訳です。大学でこれを話す時は、「今の日本というのは、学生と先生と、どっちが、殺人しやすいかといったら先生の方なんですよね、年代からすると、君達若者ではなくて、こっちの方が、リスクのある人は多いということになるんです」と話します。こんな国は、他にありません。余り知られていない事なのですが、日本という国は、世界で稀、例を見ない位な速度で、戦後、一貫して殺人率が減りました。これはそのグラフで、一番向こうは一八八〇年でこちらは二〇〇〇年までとつてありますが、一八八〇年から、第二次世界大戦の一九四五年までの間を見ると、一番

目に付くのは、第二次大戦の所で、殺人率が激減していることがわかります。第二次大戦以前は変動はしますが、日本全体の百万人あたりの殺人率は、三十人から四十人の間を変動し、大体三十五人位だったんです。百万人あたり三十五人の殺人者が出るというのが、普通の状態だったのです。それが、第二次大戦が始まると共に激減します。これは、どこの国にも見られることです。戦争というのは若者が外に出て行って、よその国の人を殺す事が当たり前の事になりますので、国内での殺人は減ります。殺す事に関わっている、二十代前半の男達が殆ど全員、外に出て行って、「合法的」に人殺しをするようになるので、戦争が始まると国内の殺人率が減るといえるのはどこの国でもみられます。それで日本も激減した訳ですが、四五年に、戦争が終わって、復員が始まり、戦後のどさくさという、すごい時期になった時に、また、殺人率は回復して、元と同じ水準になります。ですから、四〇年代の第二次大戦のところまで激減していますが、一九五〇年五五年辺りはまた同じになります。昔の日本はどんな国だったかというところあたり大体三十五人位の人殺しが起こるような社会でした。それが、一九五五年以後、一貫して殺人率は減り続け、九〇年の終わりだと百万人あたり十人で、昔の三分の一以下です。そして今は百万人あたり八人位ですから、もっと減りました。これは誰も認識していませんが、日本のような国はきわめてまれです。例えばアメリカは殺人率が大変高く、百何人という数値ですけども、それを何とかしようとして社会政策等を尽くしましたがなかなか減らない、という状況です。またドイツは、東西ドイツ統一以後は増えてますし、ロシアは、共産主義時代のデータはあまり正確ではないのですが、ソ連邦からロシアになった以後は激増しています。それからイギリスやスウェーデンなど色々な国では、横這い状態です。つまり先進国の中で戦後、経済的に復興した国は色々ありますけど、戦後の五十年の間に、こんなに一直線に、殺人率が減少していった国というのは日本以外にありません。これは、戦後日本にしかない特徴を表しているはずで、先程も述べましたように今は、中高年の方が若い人より殺人の出現率が高いのですが、昔はどうだったかと言いますと、これは年齢別に、しかも男の人の殺人率です。殺人の殆どは、男がやる事です。女の人の

殺人は、子供を殺す、生んだばかりの嬰兒を殺す、あの嬰兒殺という所で出てきますが、大人の女が大人の女を殺すとか大人の男を殺すことは非常に少なくて、殺人は、男が男を殺す事が殆どです。その話は今日は詳しくはしません。これは男の人の、あの年齢別の殺人率で、そのそれぞれの年齢、百万人あたりに対して、どれだけ殺人があるかということ、ざつと見るとこういう三角形が見えます。これは一番上のびつと出ている三角形、このグラフは一九五五年の時の、年齢別殺人率です。つまり、十代の殺人は殆どなくて、ティーンエイジャーの終わりの方、十八、十九あたりから殺人が多く出てきて、二十代前半が一番殺人率が高く、年を取る毎に急激に減るということを示しています。これは、どこの国でも、どの文化でも見られます。ですから年齢別に、男の人の殺人の出現率を取ると、こういう三角形になるのが殆どです。殺人は、男の人が男の人を殺すという殺人が多い訳ですが、それも、若い男、二十代前半の男が他の男を殺すというのが、大部分です。これは今のアメリカもカナダも、イギリスもヨーロッパ諸国も、それからもつと文化の違うアフリカとか、色々な所でも、この三角形があつて、二十代前半が一番殺す率が高くて、年をとる毎に急激に減るという現象が、大体、世界中どこでも見られます。ところが日本は、年を取っている方が下がるよりは、若い方が下がる率が非常に早く下がっていくので、六〇年・六五年・七〇年・七五年と、九四年まで来たときに、殺人率は、若い人が殺さなくなったから激減したのです。二十代前半にあつたピークのラインがなくなりまして。ですから今、九〇年代の下の二本の線を見ると、ぺっちゃんこで、全然山がありません。そこまで二十代前半が減つていったのに対して、四十代五十代の減り方が少ないので、今は若い人達よりも年を取った世代の方が率としては高い、という逆転現象が起こつてます。それは、今は、ティーンエイジャーとか若い人よりも、中高年の方が殺すといつても、中高年の殺人がどんどん増えていったからではなくて、殺人率の下がり方の度合いが、若い人の方がどんどん下がったのに対し、中高年はそれ程下がらなかつたという事です。つまり、日本の中高年がどんどん殺人をするようになった訳ではなくて、減り方が若い人に比べて少ないため、逆転したという事になります。問題

は、戦後五十年の間に二十代前半の殺人率がこんなに激的に減ったのは何故かということです。これが、戦後日本社会の在り方をよく反映した事であるのですが、戦後の日本の殺人率は世界に例を見ない速度で一方的に減少しまして、こんな国は他にありません。それは、どうしてかという主にも、若者における殺人率が極端に減少していったからです。結局、殺人率だけをとると、日本は、世界で最も若者による殺人が少ない国の一つです。二十代前半の若者達が、ここまで人を殺さない国は他にあまり例がないのですが、イギリスのイングランドでは日本と大体同じ水準で、若者が人を殺しません。しかし、二十代前半に限って言うといギリスの方が高いです。全体の殺人率は日本とイギリスで大体同じなのですが、イギリスは二十代前半の殺人率が高いですから、日本ほど若い人が殺さない国というのはないということになります。この事実を日本人がちゃんと認識していないのは、不幸な事じゃないかと私は思います、この事実にも関わらず、毎年毎年世の中は悪くなる一方だとか、若者は狂暴になる一方だとかいう風に報道されたり言われたりしているのは、不幸なことです。我々は期せずして、こんなにも、安心できる国といえますか、あの意味で幸せな国を作った訳で、それはやはり、事実としては認識した方が、日本という国の理解になると思えます。それで何故かという事ですが、それがあの「心の本質主義」ではなくて、要は社会が人をどう作っているかという一つの例をお見せします。これは、日本じゃなくてアメリカのシカゴなんですけれども、シカゴという街は、日本では想像もできない程に、貧富の格差があります。勿論、黒人と白人の人種差別もありますし、白人の金持ちが住んでいる地域と、黒人の貧乏な人達が住んでいる地域というのが、区画によって明白に分かれていて、不平等がこの目の前で見えるような凄まじい街なのです。そのシカゴを、四十五の区画に分けます。そしてその四十五の区画ごとに、そこに住んでいる人達が、殺人以外の理由、つまり病気であったり、怪我・事故など殺人以外の原因で死ぬ死亡率から、その四十五の区画にいる人達が、生まれた時に期待余命が何歳であるか、ということを横軸にとりました。それと、その、それぞれの区画で起こっている殺人率、というのをとってみます。それは何を意味しているかとい

うと、その不平等の街の中で、殺人以外の死亡率を換算して期待余命を出すということは、五十歳から八十歳までの開きがありますが、期待余命が短いということは、殺人ではなく病気や事故で死ぬ、又は栄養失調・餓死などで死ぬ率が高いという事になります。一方、期待余命が長いというのは、病気や怪我等で死ぬ可能性が低い、よくみんな長生きするという社会です。それと、殺人率が、あそこまできちんと相関してきます。ですから、殺人ではなくて、病気や怪我や、餓死・栄養失調というような事で死ぬ率が高い、その出生時の期待余命が短い場所ほど、殺人率が高いのです。ですから、殺人以外の理由で、自分はどうせ、誰も世話してくれなくて死ぬだろうと、病気になったって病院なんてあまりないし、病院に行くことすらできないし、怪我をしたって、ちゃんと救急車なんか来ないし、そして、その、麻薬中毒とかなんかで栄養失調になって死ぬかもしれない、というような社会は、殺人が多い訳です。そしてちゃんと病気のケアもできて、自分が減多な事では死なないという安心感がある地域では、殺人も少ないということになります。ですから、殺人で死ぬ率と、殺人以外で死ぬ率というのを分けて、どれだけ、殺人以外の理由で、自分はどうせ死んじゃうだろうという気がする場所であるか、それとも、自分はきつとずっと長生きできるだろうと思う場所であるか、というのを見ると、殺人以外の理由で、長生きするような気がする社会では殺人率も低く、殺人以外の理由で、自分があんまり生きないだろうという気がする社会ほど殺人率が高いという事が、分かります。これは本当にすごい例で、シカゴは、アメリカの一つの町、アメリカという一つの国の中の、同じアメリカ国民の一つの町ですが、その中で、生まれた時の平均期待余命が、五十から八十までの差がある不平等な国な訳です。このような格差があるところは減多にないのですが、カナダでも州毎に、殺人を除いて自分がどれだけちゃんと生きられる気がするという州であるか、そうでないかというのをとると、全く同じ事が言えます。つまり社会的な、世話のケアの程度が低い、そして所得も低くて、自分に何か起こったら多分、世話されずに死ぬだろうという気がする州ほど、殺人率も高いのです。命に対する感覚が低く、自分の命があんまり尊くないと思われる、世話されていないと思う社

会ほど、他人の命も奪い易いということになります。ですから、その違いは、所得の事とか、病院などの施設がどれだけきちんと整っているかとか、警察や消防署・救急車がどれだけちゃんとして、住民を守っているか、という事と、殺人率が非常にばつぱりと相関している事を示しています。それはリスクに対する人間の態度がどう変わるかというのを、リスクに関わる要因でとってみますと、危険な行動によって失うものがない人ほど、危険な事をします。そして危険な行動をとる事によって得られるものが大きい気がする人ほどリスクをとります。では人を殺してしまうとか、何かを爆破してしまうとか、最近ですと自爆テロとか、危険な行動によって失うものがない、という気がする人はどういう状況の人かというのと、大切な人がいない人、財産がない人、職や社会的地位がない人、そして自分の健康もよくない人たちです。、こういう自爆テロみたいなのは、自分の置かれている民族、国の状態自体が、もう自暴自棄になって構わない、もうこれ以上、アメリカの横暴なんかで叩かれていてもしょうがない、先が見えない、だったら全部やっちゃえという、そういう失うものがない訳です。ぎりぎりまで追い詰められた、という気がした人は、失うものがないから、なんでもやっちゃえ、それによって得るものが大きいような気がするのです。では日本の、社会とか、普通の社会の中で見ると、どういう人が危険な行動をとってもいいやと思うか、というと、子供や配偶者、友人、家族など、自分を大切に思ってくれて、自分も大切に思っている人がいない人や、蓄積した財産がない人、安定した社会的な地位や職がない人、または、明日死ぬかもしれないという程自分の健康状態が悪い人たちです。失うものがない人たちにとっては、明日なんてどうでもいいということになりますから、それは大きなリスクをとってもいいと思うことになるのです。戦後の日本の若者は、危険な行動をとると失うものが大変多いと思うようになったのですが、その変化の中には、日本に固有のものもありますし、戦後世界全般に通じる事もありますが、日本にかなり特有な事情についてお話しします。日本は急速に所得が伸びましたから、戦前に比べれば、みんながとてもお金持ちになって自分の財産というのを持って、楽しい事にお金を使う事ができるような気がしてきたのです。そうすると、今

こんな所で馬鹿な事をしてしまったらそれが台無しになりますから、しない方がいいという風に、リスクをとらない方になります。日本は、戦後また非常に寿命が延びまして、色々な病気のケアも、行き届くようになりましたから、戦前に比べればすごく、病院等の対応も良くなりましたし、寿命も延びました。だから若い人達に、自分がすぐ死ぬという気がしてる人は殆どいません。私はこの間自分のクラスで、学生達に、「君達は、大体いくつまで生きるという気がしていますか？」と聞いたら、みんなが八十歳だと言いました。今の若い人達は、殆どの人達が、自分が何らかのことで死んじゃうだろうなんて思ってもいない訳です。それから三番目のこれも、割と日本に固有なのですが、日本では、GNPが伸びて、金持ち度が上がったと同時に、貧富の差が非常に小さくなりました。戦後の日本の特色は、アメリカやイギリスと違って、貧富の差が拡大しながら、GNPが増加したのではなく、貧富の差が縮まりながら、GNPが増加したということです。ですから、「一億総中流化」と言われていたように、戦前の方が余程、金持ちと貧乏人の差が大きかったのですけれども、それがなくなるように、みんなが平等に金持ちになったのです。つまり、不平等感が非常に小さいのです。先程のシカゴの例ですと、シカゴという同じ街の四十五の区画で、その期待寿命が五十五歳から八十歳まで違うという不平等が、目の前に見える訳で、隣の地域に行ったら大金持ちがこんな事をしているのに、こっちの隣に行ったら自分達は何なんだという、非常な不平等感が目の前にあるような社会ですけれど、日本はそれがなくなりました。実際はなくなっただけではないんですが、その格差というのを感じないことで、自分が非常に虐げられているというように感じる人があまりいなくなっただけです。貧富の差は、小さくなりました。また、急激に高学歴化しました。高学歴というのは、将来の保証があるという事です。低学歴で働きに出たものの、実際どういふ風に生きていけるのかはよく分からない、という若い人が大きく減り、大学進学率は戦前の五〜六%から三十数%まで上がりました。大学に行くという事は、一生懸命積み重ねてきたものがたくさんある、つまり高学歴という事に投資し続けたということです。簡単には失うわけにはいかないといえるでしょう。そのような高学歴化は

確かに何処の世界でも起こったけれど、日本に、固有に起こったのは、学歴と年功序列と終身雇用というものが一セットとなった現象だといえます。二十二で大学を出て、六十位まで保障されるという雇用構造になったのです。馬鹿な事さえしなければ、六十歳まで所得が保障されるような安心感のある社会を作ってきた、というのが日本の高度成長です。それは若い人達の将来の見通しをも変えたのです。その将来、若い人達が、割と、よく分からない、戦争もあつて死ぬかも分からないというような事が全部なくなつて、みんな、馬鹿な事さえしなければ、六十位まで多分うまく給料は貰えるだろう、そして、努力さえ怠らなければ、毎年の給料も確実に良くなるという事を、社会全体が保障したようなものです。将来自分がどうなるだろうという事に関して安定感をもたらすような社会構造にしたわけですから、当然若い人達の馬鹿な喧嘩による殺人も激減した訳です。また、これは推測ですが、こういう事によつてGNPが増加して貧富の差が小さくなり、ジニ係数が少なくなったのが今日の十代後半から二十代の若者の親の世代です。親世代が金持ちになったので、彼らには、余裕があります。いわゆるフリーターなどをやることで、ほとんど稼ぎがなくても、餓死する寸前になるかというとならない。親世代が救つてあげられるわけです。これら全てが重なつて、戦後の日本の若者というのは、自分が持っているものがたくさんあるように思える、言い換えれば、失うものがたくさんある、ように思える、そのような社会ができていったのです。経済的に高度成長をもたらした日本の社会構造が、若い人々の意識を変えたということは明らかです。殺人というものが普通どのようにかかるか、ということをお話ししましょう。私は地方裁判所における殺人事件の一審判決というのを、三千件以上分析しております、一九五〇年代からの日本全国の事例を手にとつて内容を分析したのですが、新聞等で報道されているような、おどろおどろしい殺人事件や、保険金詐欺のように非常に巧妙な手口を考案して殺したなどというような殺人事件は、普通起こっている殺人事件の％ほどにすぎません。大方の殺人事件というものにおいては、誰がどのような理由で、誰をどのように殺すかという、本当に考えられないほど、つまらない喧嘩によつてです。酒場などで口論となり、

非常に腹立たしい事を言ったとか、先に頼んだのに相手が先に取ったとか、または馬鹿と言ったら馬鹿とは何だ、馬鹿はお前だろうというような事がエスカレートしたとか、その程度の馬鹿馬鹿しい理由で殺すのです。一九五〇年代の二十代前半の若者の殺しも全く同様であり、アメリカやカナダ、イギリスの例をとつても同様です。九〇年代から二〇〇〇年にかけての日本における、四十代・五十代の中高年の殺人理由と全く同じなのです。ただ、年齢だけが変化しています。若い男性に起こりがちな犯行なのですが、今の日本ではどちらかというと中高年です。中高年の殺人率が非常に高い。ではその中高年とは誰かという点、多くはホームレスの人達や、安定した職がなくて日雇いで転々としている人などで、いわゆる高学歴ではありません。つまり戦後の、学歴、年功序列、終身雇用というものに乗れなかった人達です。従って、安定的な将来の見通しというものを殆ど全て奪われてしまった、という表現にもかえらるると思います。戦後の日本の高度成長を支えた、学歴、年功序列、終身雇用というのは、確かに安定した見通しを与えたけれど、そこに乗りきれなかった人達には全くそうではない。日雇い労働を転々とすれば、住宅もないわけです。日雇い労働というのは、その建築現場に所属している仮設住宅などに暮らす訳なので、その仕事が終わると、住む場所もなくなってしまう。社宅というのもそうです。その会社に勤めていけば住む場所があるけれど、クビになったらなくなる。日本の高度成長を支えた経済的な基盤の中に、非常に安定を欠く集団というものを作ってしまったっており、中高年になった彼らが殺人をしています。理由はかつての若い人達とおなじで、やれ自分の酒だと思つていたものをこいつが飲んだとか、日頃からお前の口のきき方が悪いとか、どっちが上だとかどっちが偉いんだとかという事で刺してしまふ、そのような事です。探偵小説とか推理小説に出て来るような、面白い、周到な殺人なんていうのは殆どありません。いわば、子供の心が荒廃したなどという話ではなく、社会状況が変われば人間というのは非常に変わるといふ事です。私はその三千件の一審の判決文をずっと読んでいて、殺人者の中にはこれはまあ随分酷い人だといふ人も勿論居ます。しかし、こんな状態に置かれたら私だって殺すだろう、というような状態の中で殺す

という例もたくさんあります。かなり前のことになりますが、新宿でバスに放火して何人も殺したという事件がありました。彼は小学校しか出ていないままに、戦後東京に出て来て働き始めましたが、全然安定した職はなく、奥さんにも離婚されて、色々なところで転々と日雇い労働をしていましたが、多くの人たちから馬鹿にされ、放火したその日などというのは、人から散々馬鹿にされることが続く訳です。もう奥さんも居ない子供も居ない、失うものは何もなく、残るは自分のプライドだけなのですが、それをみんなに馬鹿にされた、という事でやってしまった。ああいう状況になったら私だってやるだろうな、という気がします。すなわち、人を取り巻く社会的状況というものが大事で、心そのものが本質的に悪いのだという話ではないと思います。次に、戦後の日本社会を非常によく表していると思うものの話をしたいと思います。親の子殺しと、子の親殺しに関してです。まず、親が子を殺す時の話なのですが、嬰兒殺ではありません。産んだ直後にその赤ちゃんを欲しくないということで殺すのが嬰兒殺ですが、それではなく、十代後半以後の殆ど成人となった子供を、親が敢えて殺す事件についてです。これはそもそも、頻度としては非常に少ないといえます。親は手塩にかけて育ててきた子供を、大人になってから殺すということは滅多にありません。しかし、それが起こる時を、五五年と九〇年代とで比較してみます。昔は、親が成人になった子供を殺すという時は父親でした。どういう父親かというと大体五十代後半というパターンです。それ以外は非常に少ない。では殺された子供はどういう子供かというと、殆どは息子です。二十代後半の息子が殺されるといふ事件が殆どで、娘が殺される事は殆どない。つまり、一九五五年に、親が成人に達した子供を敢えて殺すという状況は、二十代後半の息子を五十代後半の父親が殺す、というものが殆どでした。彼らは未婚の息子達です。同居率も高いです。ではなぜ彼らを父親が殺したのかというと、その動機は、息子たちの方が酒乱である、家庭内暴力をふるう、あるいはギャンブルなどで散財する、または働かないで無為徒食である、覚醒剤中毒である、などなど、そのような事です。二十代後半にもなった息子というのを五十代後半の父親が敢えて殺すという時は、もう駄目だという時です。息子の方が悪いとい

えます。酒乱や暴力は、十代後半という思春期あたりから始まり、その後長年その家は、荒れに荒れている訳です。親子関係というのは切れませんし、そして息子は未婚で同居していますから、父親を始めとする家族は、毎日その辛さに向き合わなければなりません。それが十何年、長ければ二十年も続く訳です。そして最後にもうどうしようもなくなり殺してしまおう。これが五〇年代の日本にはよくあつた事です。ところが九〇年代はどうなつたか、というと、子供を殺す親の年齢は、五十代後半から六十代後半までというふうにしだして広がっています。さらに父親だけではなくて、母親も子供を殺害するようになってきました。五〇年代には、母親が子供を殺すなどということは皆無に近かつたのですが、最近はそうではありません。父親も母親も、年齢的には広がりが出てきています。殺された子供の方にも、随分広がりが出てきています。以前のようには、二十代後半の息子と五十代後半の父親の葛藤という事ではなくて、かなり広がっています。そのうえ、息子だけでなく、娘も殺されています。一審の判決文をずっと読んでいてやり切れない思いになるのは、子供を殺す動機です。子供の暴力という理由が一番、それから中毒というのが二番目です。これは覚醒剤中毒とか麻薬中毒ですが、それらを理由とするという殺害事件数が高い事は、五〇年代と変わりません。ところが、最近かなりな頻度で出てきたのが、子供が精神障害である事を苦にして、というものです。これは五〇年代の八九六例の中には、出てこなかったのです。ない訳ではないでしょうけれど、サンプルした中にはなかったのです。九〇年代というのは、子を殺す親の年齢も、殺される子供の年齢も、上昇しながら広がっていますが、そこには親子葛藤の年齢の層の広がり、つまり子離れの混乱化、というものがあつたのかという問いもあります。しかし動機の一つは変わっていません。すなわち被害者である子供が、家族の資源を浪費し、時間的にも精神的にも特定の子供が非常に負担を強いている、というものです。しかし九〇年代の精神障害とか知的障害という新しい理由は、おそらく家族状況の変化によるものだと思います。核家族化で子育てに関わる人間の数が少なくなつたうえ、共同体やコミュニティというのも多くは崩壊し、家族以外のネットワークがなくなつてしまつた。そこで全ての負担は、母親

一人にかかってくるようになります。例えば知的障害の子供や精神障害の子供をずっと育てていくというのが、母親一人に集中し、とても負担になります。成人になるまで一生懸命育ててきたけれど、これ以上はだめだ、という程に、子育てに関わっている人間の数が非常に少なくなった事から、負担が分散されず、もうやっていけないという感じが非常に強いわけです。加えて、高学歴化と少子化により、一人の子供の価値が肥大しています。かつてのように、家の中に子供が四人も五人もいるのが普通で、そのうちの一人は病気で死ぬこともあるかも知れない、一人は障害のある子がいるかもしれない、しかしごちゃごちゃと育てていきましょう、という家族形態ではなくなってしまった訳です。核家族化でコミュニティ欠如で、父親は大抵働いているから母親が全負担を負い、そこで二人か一人しかない子供が、知的障害や精神障害だった、というショックは、それ自体が大きいといえます。そもそも一人の子供に対する価値が、過去に比べ肥大しており、子供に対する期待が大きいため、子育ての失敗が全く許されないような感覚で、それが全て母親という一人の人間に集中して分散されない、という苦しさが出てきているのではないかと思えます。ただし、先程も言いましたように親が大人になった我が子を殺す事自体が殆どないことなので、そういう事件が激増してきた、などということは全くないのですが、理由の変化は環境の変化を表しているのではないかと思えます。また、それとは逆に、子供が親を殺す時ですが、これも非常に頻度は少ないです。ですから、激増しているとは決して言いませんが、少なくとも頻度は増えています。五〇年代はどうだったかというところ、これもまた殺されるとすれば父親でした。しかも同様に五十代後半の父親でした。では、殺した子供の方はというと、殆どが息子です。親殺しの理由は、殺された父親自身が、酒乱だったり、家庭内暴力をふるっていたり、女がいたり、散財したりと、先程の、父親がどうしようもない息子を殺すというのと全く逆で、息子が、どうしようもない父親を殺すという事例が殆どだった訳です。ところが、九〇年代に入ると、母親が殺される事例が非常に増えました。また、五十代後半ということではなく、年を取る程殺されるという母親が増えている。父親の場合も、六十代や七十代に殺されている人は

多いといえます。親を殺した子供の年齢分布を見れば、息子の場合はべつたりと二十代前半から五十代までが殺しに関わっています。昔はあまりなかったけれど、現代では娘が親を殺す事も多く、これも年齢層が非常に広がっています。ですから、子供が親を殺すという事件の内容が様変わりしたということが言えます。理由は、殺された親自身が酒乱で暴力を、というものが挙げられます。これに関しては、昔と同じです。ところが、親が病気ということで一括してはいますが、増えているのは痴呆の介護によるものです。パーキンソンやアルツハイマーなどで、散々苦労しながらやってきたけれどもう駄目、と、殺すという事例がこれだけ増えている訳です。長生きするのは女性の方ですし、痴呆は女性の方が多く、高齢の母親が殺される事例が非常に多くなっています。介護疲れです。つまり九〇年代には、介護問題というものが、親殺しの非常に大きな動機になりました。まとめると、成人親子間の葛藤というのは、どうしてもあるのです。しかし、親自身が自分の自己維持にどれだけエネルギーを注ぎ、資源を注ぐか、加えて子供が三人いれば三様に、二人いれば二等分に、配分したい、と感じるのと、酒乱であったり無為徒食だったりというある特定の子供が、自分に使って欲しいと要求する資源の量とにズレが生じた時に、もともとある親子間の葛藤が非常に目立った形になるのです。親は、ある特定の子供に全部吸い取られてしまうという事は、我慢ならぬわけです。成人親子間に当然ある葛藤は、子供が子離れし独立して、自分自身の稼ぎによって自分自身の家族を養っていきながら、親とはある一定の距離を置くという事になると、その中にある資源配分問題は、一応解決される事になります。しかし、子供がずっと未婚のまま同居していて、その親からどこまでも何かをむしり取ろうとするような状況となったり、逆に未婚で同居している息子に対して、親が酒乱であったりなどという場合、この資源配分問題が葛藤を引き起こします。暴力に関していえば、肉体的暴力というのは恐怖を植え付けて他人を操作する、自分の思い通りに動かすという事なので、暴力を受けている方は、単に痛いなどという事ではなくて、自分がその相手に好きなように操られるという事への虚しさや嫌悪感が非常に大きくなります。そこからどうやって脱するか、という事が問題です。介

護というのも、先程の説明と同様に資源配分問題で、現在の社会保険や社会保障の範囲内で、そこにどれだけ自分自身のエネルギーや時間、そして感情を取られてしまうかということはまだ分かりませんが、家族の中だけで、この他にネットワークもない状態で介護をさせられるならば、自己維持にあてるべきものを全て取られてしまうという事になって、とても続けられるものではありません。介護が原因での親子の殺人というのが、昔なかつたのにあるというのは、結局は家族構造、社会構造の変化によるもので、核家族化と少子化と高齢化、という事がセットになって、個人にどれだけのストレスを生んだか、という事だと思えます。日本人の心が荒廃した、心が悪くなったのではありません。ストレスがこのようなタイプの殺人を引き起こしている、という事だと思えます。若者の場合は逆に、社会構造や家族構造の変化によって、余りにも将来に対して安定的な見通しを持つのですから、危ない事はしたくない、リスクは取りたくない、という社会状況が蔓延しています。人を殺さないという面では、よい事です。しかし、あまりにも将来が安定しているからこれを壊したくない、だから危険は取りたくないというならば、冒険をしないということにつながります。確かに今の若い人達は、冒険をしません。大学での卒論や修士論文などのテーマをとつても、必ず二年間できちつとまとまるようなテーマでしかやろうとしません。もしこれを研究していけば、非常に面白い事になるかもしれないけれど、失敗する可能性もある、そこに賭けてみようというような学生は殆どいなくなりました。私の博士論文は、アフリカで野生のチンパンジーを研究するものですが、昨今では、どうなるか分からないアフリカに野外調査に行つて研究したい、という学生は殆どいません。ですから、後継者というのが現れにくいのです。どうしてアフリカやスリランカには行きたくないの、と聞くと、危ないところは行きたくないとか、暑いところはいやだとか、蚊に刺されるのが嫌いとか、そのような理由から、安全に綺麗にできる事しか選びたくないという若者が確かに増えています。彼らはきつと人は殺さないだろうな、と思えますので、そこには、いい面も悪い面もおそらくはあるのでしよう。結論になりますが、全ては「心」が生み出していると思つてはいけない、ということですが、好ましくな

い行動をとっている人がいても、その人の置かれている状況の下ではそうするしかないかもしれない、と考える必要があると思います。人間はどこでも、互いに互いの行動を支え合つて、互いの行動を引き出している訳ですから、ネットワークを歪めてしまう社会構造であるならば、いろいろな所に歪みが出ます。ですから、互いの行動を支え合う均衡点を実現するためのシステムがおおまかにはできている訳ですけれども、より望ましいシステムを作るという事が大事になるわけです。システムが違えば、心のあり方が似たような人間でも違う事をするでしょう。従つて、「殺人」という行為は本質的な心の問題であると思うよりは、望ましいシステムや助け合うことのできるネットワークを作りましょう、支えがないのならばどこかに支えを作りましょうと考えたい、それが私の結論です。どうもありがとうございます。（拍手）